

「見る」を含む学習の系統性（5）

－源氏物語「須磨」－

坂東 智子*

Systematicity of Learning Including “Seeing”(5)
－ The Tale of the Genji “Suma” －

BANDO Tomoko*

(Received September 22, 2022)

「須磨」巻は源氏物語を読み解くための要所である。そのため本稿では2002年に制作された現代の源氏絵と高校教科書採録の「須磨の秋」原文を対照させながら対話的に読む授業提案を行う。須磨での光源氏の複雑な心情を表すために顔を二重像にし非現実的な表現で描かれた現代の源氏絵を見た学習者は、「なぜこのような描かれ方をしたのか」という「問い」を持ちながら原文を読みすすめていく。物語の転換点ともいえる「須磨」巻を、物語全編の中に位置付け、学習者の現在と関わらせて読む「場」を成立させるために、今回はあえて現代の源氏絵を用いた。「学習意欲が高まらない」ことが長年、高校古典授業の課題として指摘され続けている。そのため少しでも意欲的、主体的に読むための方法のひとつとして絵画と原文を対照させながら読むことを継続して提案している。また2022年度に看護学校と大学の教養教育で筆者自身が行った2度の授業を対象に、絵を用いることの有効性だけでなく、指導者の手立てと学習者の反応がどう関係するかについての分析考察を行った。これにより絵画を用いた古典授業の具体的な留意点、課題を明らかにした。

1. はじめに

「須磨がえり」という言葉がある。

全54帖の長大な源氏物語を通読しようとして、「須磨」巻（12帖）まで読み進んだところで、「それまでの物語の経緯がはっきりとつかめてないのに気づいて、初めの桐壺の巻から読みかえそうとすることである。」

（鈴木1998a）源氏物語は、内容や人間関係が複雑であるため、物語を読み解くために、年表を作成したり系図や梗概などを作成したりする工夫が、室町時代あたりから様々に試みられてきた。現代語訳もその工夫のひとつである。

本稿が提案する現代絵画と原文を行き来しながら読むことも大きくはそれらの工夫の一方法である。が、2017年からの継続研究としての本研究の一環した目的については、先に述べておく必要があるだろう。

本研究は、国語科における言語化能力と連動する「見る」力の系統的な育成と、現行教科書教材を用いた小中高大の系統性を意識した「見る」を含む授業提案を

目的としている。国語科において育成すべき力については、「言葉の力」「言語能力」「言語化能力」などの表現、捉えがなされている。中でも本研究では「言語化能力」¹⁾を活性化させ強化すること、つまりは豊かな言語生活を生み出す「言葉」そのものを生み出す力としての「言語化能力」の育成を目指している。絵画等の視覚的資料を「よく見る」ことと言語によって表現されたものを行き来しながら対話的に読むことは、言葉を生み出していくための効果的な「場」となるというのが、本研究の第一の仮説である。

2018年からは高等学校「古典B」教科書²⁾に採録された竹取物語、源氏物語の原文を取り上げてきた。高等学校の古典の授業では、「学習意欲が高まらない」ことが長年の課題として指摘され続けている。その課題を解決するためにはどのような学習方法が有効か。いわゆる定番とされて多く教科書に採録され続けている古典教材を取り上げ、「古典を学ぶ意味や意義」「古典を学ぶ楽しさ」を少しでも実感してもらえたらという願いのもと、

* 山口大学教育学部, 〒753-8513 山口市吉田1677-1, t.bando@yamaguchi-u.ac.jp

絵を「見る」活動を含む授業提案を継続して行っている。

古典作品の原文を絵画（もう一人の読者の読みとその表現）と行き来させながら対話的に読むことで、物語内部の記憶だけでなく、物語が内包する集合的記憶（共同的な知の記憶）のリコール（再生）の場が生成されやすくなり、読み手自身の記憶を含めた記憶のリコールが行われる。それによって、古典を自分とは別世界のものとして理解するのではなく、「自分の経験や既知のもの」と関連付けて認識する「時間軸や空間軸にテキストを位置付けて認識する」³⁾といった、「社会や自分との関わりの中で」古典（伝統的な言語文化）を読み、その価値に出会う可能性が高まること、絵画を用いる理由である。

本稿が対象とする「須磨」巻は源氏物語を読み解くための要所である。物語全編の流れを理解するためにも、学習者の現在と関わらせて読む「場」を成立させるためにも、原文を今回は2004年に制作された現代の源氏絵と対照させながら対話的に読むことを提案し、その有効性と具体的な留意点、課題を明らかにする。

2. 教科書教材としての「須磨」

2.1 教材化の史的変遷

一色（2001）は、明治期の旧制中学校教科書では、「若紫」よりも「須磨」がやや採録が多く、昭和戦前期に至るとそれがさらに顕著になったと調査結果を報告する。旧制中学、女学校では、源氏物語からの採録のおおよそは「須磨」に絞られていく。また、源氏物語の学習の中心は、明治期から始まった「須磨」の名文鑑賞であった。その後、戦後昭和20年代の新制高等学校においては、「若紫」垣間見が教科書採録の最多となる。戦前の「須磨」最多採録、名文鑑賞とは状況が一変する。これについては、「風景から人間へ、という変換の時は戦後の所謂民主化と背中合わせである。」と原岡（2017）はいう。教科書の採録箇所や扱い方において、時代背景や社会制度の変化が直接に影響していることが分かる。

2.2 現行「古典B」新「古典探究」の採録状況

本研究ではこれまで高等学校教科書「古典B310 古典B 古文編」（大修館2014）に採録された古典教材を取りあげてきた。同教科書は、『竹取物語』や『伊勢物語』、『更級日記』の採録箇所が『源氏物語』との影響関係が見えやすいものになっている。また、『源氏物語』では、「桐壺」冒頭と「若紫」垣間見の間に藤壺入内の経緯を挟み込む構成であり、中盤、終盤に「葵」「須磨」「薄雲」「若菜上」「御法」「橋姫」を採録しており、紫の上の生涯が概観できる。全編を貫いて繰り

返される「形代」というモチーフが見えやすい。加えて「橋姫」「若紫」の垣間見場面の比較が可能である。それらがこれまでの使用の理由であった。

令和5年度からの新科目『古典探究』教科書の採録教材や編集方針も公表されつつある。大修館の新『古典探究古文編』『精選 古典探究』はともに「須磨」巻から「須磨の秋」を採録している。三省堂『精選 古典探究 古文編』は「心づくしの秋風」として採録。東京書籍『新編古典探究 古文編』も「須磨の秋」を採録している。採録箇所の詳細はまだ確認できないが、「須磨の秋」「心づくしの秋風」という教材名からは、「須磨には、いとど心づくしの秋風に」から光源氏の歌「憂しとのみひとへにもものは思ほえて左右にもぬるる袖かな」までの採録ではないかと推測される。

新科目「古典探究」になっても、「須磨」巻の採録数、採録箇所に大きな変化はないものと考えてよいだろう。学習内容の詳細についてはまだ確認できないため、本稿では今までと同様に大修館「古典B」を使用する。

2.3 「須磨」の学習内容（「古典B310」）

大修館「須磨」の学習のてびきでは、語句の意味の説明、雁にちなむ四首の和歌それぞれの詠んだ人の心情、白居易と菅原道真の漢詩の引用それぞれの効果について考える課題が示されている。語句は、①心づくしの秋風、②枕浮くばかり、③鼻を忍びやかにかみわたす、の3カ所である。いずれも光源氏をはじめとする人々の様子や心情を表した箇所であり、表現内容の説明を求めている。「須磨」はこれまで「風景の須磨」と言われてきたが、実際には風景のみの描写は意外に少ない。それに比べて、漢詩文をはじめとした引用や和歌が多く、それらの韻文表現や引用語句に配所での光源氏や同行の人たちの思いが織り込まれ、重ね合わされているのが特徴である。そのため、和歌から心情を読み取る、漢詩の引用表現から須磨の土地がら様子、光源氏の心境を読み取るといった手引きに見られるような学習が中心となっている。

3. 源氏物語における「須磨流離」とは

3.1 須磨とはどのような土地か

須磨とはどのような土地として描かれているのだろうか。『源氏物語ハンドブック』『物語の舞台』（鈴木1998b）には、次のように概説されている。

『源氏物語』の土地のなかでもっとも著名ともいえる須磨、そして明石。土地の名が巻名にもなっているのはこの二つだけである。（中略）須磨下向は源氏の自発的な退去として語られるものの、実質的には流離に等しく、物語は、菅原道真（八四五―九〇三）や在原行平（八一八―九三）などにかかわる表現を用いて

流離の印象をつくり上げている。実際、行平は『古今和歌集』によれば須磨に蟄居している。源氏が須磨に下らなければならない必然性は、古来からの話型である貴種流離譚の枠組みによるものといわれる。
(pp.139-140)

須磨の様子は漢詩文や和歌からの引用に基づいた表現が中心で、それらから配所の土地であることや流離の印象を間接的につくりあげる表現方法がとられている。物語の展開として、源氏の須磨流離の必然性は、貴種流離譚の枠組みによるものといわれており、また明石への移住は、光源氏が新しく生まれ変わるために必要であった。

源氏の明石への移住はなぜ必要だったのかという問題については、おそらく須磨が摂津国という畿内に属し、明石は播磨国という畿外であることがかわりが深い。畿外という朝廷の支配地域の外部に出ることによって、源氏はまったく新しく生まれ変わることになるのである。これは神話における死と再生のモチーフと共通する。(p.140)

須磨は畿内、明石は畿外である。畿内から畿外で出るとは、朝廷の支配地域の外部に出ることであり、そこでまったく新しく生まれ変わる、つまり再生するのである。



図1 平安京から須磨・明石へ

筆者は大学の一般教養や看護学校の授業では、須磨の地理的位置を確認し須磨流離の意味を解説するために、図1のスライド(地図)⁴⁾を用いている。地図で位置関係、平安京との距離を視覚的に確認しながら、先行研究をもとに次のような解説を行う。朝廷の支配地域である畿内の須磨に対して、朝廷の支配地域の畿外が明石とする二項図式もあるが、須磨・明石を畿内、境界、畿外の三項図式で捉え、どちらも境界という属性を持ちながら、「須磨が畿内という内部性を抱え込んでいるのに対して、明石は畿外という外部性を抱え込んでいる」土地であるという捉え方もある。明石への移動は、光源氏が再生し都に帰るために必要なものであった。

須磨や明石という地名は現在も存在している。地図を

示すことで学習者の現在の生活とも結び付きやすく、一方で、都からの距離は同じでも移動手段が異なる等、現在と物語の時代の違いを認識する「場」となる。

3. 2 平安中期における須磨

それでは、紫式部が流謫の地として選んだ須磨は、平安中期の人々にとってどのような土地であったのか。史実や先行文学との関係を先行研究の知見をもとに確認しておく。秋山・三田村(2003)「須磨流離を考える」(対談)では、次のように語られている。

秋山 いきなり「かの須磨は」って出てくる。これは非常に唐突ですね。

三田村 「かの」って別に今まで言われてないわけですから、たしかに唐突ですね。

秋山 当時の読者がまず念頭に浮かべるのが在原行平じゃないですか。それに源高明や藤原伊周などの流罪にあった史実が縦走して受け取られたでしょうね。

三田村 藤原伊周が流されたのも野磨っていいですから、たぶん須磨の近くなんでしょうね、「磨」という字が共通していますから。(略)

三田村 (前略)『竹取物語』の中で、大伴御行が竜の首の玉を取ろうとして海の神の怒りに遭い、嵐の果てに南海から流れ着いて漂着したのも須磨ですね。(中略)だから須磨ってというのは、異界に通じる通路みたいなのがあって、畿内と畿外を分かつてる境界線だということももちろんありますけれども、何かそういう異界にも通じている場所なんだっていう感じなんでしょうね。(pp.88-89)

「かの須磨は」の「かの」は、当時の読者の共同の記憶にある須磨を想起させる表現である。秋山氏の発言「当時の読者がまず念頭に浮かべるのが」とあるように、須磨と聞けば、行平が蟄居した土地だとおおかたの読者、平安中期の女房たちはイメージした。近々の出来事としては、一条天皇のもう一人の中宮、清少納言が仕えた定子中宮の兄藤原伊周が野磨に流罪になったことである。紫式部にとっては、道長と甥の伊周との争いであり、身近におこった重大事件に関わる土地であったといえる。また『竹取物語』で大伴御行が漂着したのが須磨であった。源氏物語の絵合巻で、竹取物語を「物語のいで来はじめの祖」と評していることから、平安中期の人々にとっても紫式部にとっても、史実だけでなく古典和歌や物語世界の「記憶」を様々に呼び起こす土地(装置)、場(トポス)が須磨であったと考えてよいだろう。

3. 3 引用による記憶の再生

教科書「須磨」本文にも、多くの記憶が埋めこまれている。例えば、脚注からだけでも「心づくしの秋風」

(古今集・よみひとしらず)、「関吹き越ゆる」(続古今集・在原行平)、「枕をそばたてて」(白氏文集「遺愛寺鐘歌枕聴」)、「雁」(古今集・枕草子他多数)、「二千里の外故人の心」(白氏文集)、「恩賜の御衣は今ここにあり」(菅原道真『菅家後集』)が見てとれる。

須磨は源氏物語の中でも、なぜこんなに多数の和歌や漢詩文の表現が引用され埋め込まれているのだろうか。先にみた教科書「学習の手引き」の問いが思い起こされる。『源氏物語ハンドブック』「物語の鑑賞 須磨」では、次のような解説がなされている。

須磨の地での源氏は、ただ流離を嘆き悲しむだけに終始しない。古注釈で「配所の月を見ばやの心」と解されてもいるように、風流文事に心をやる雅やかな人の一面をも見せている。そのような源氏は、在原行平・在原業平・菅原道真・源高明、あるいは中国古代の周公亘など、古来の伝承の人々の多様な事跡を明滅させながら、新しい流離の人間像をつくりあげていることになる。(p.12)

何のための引用か。光源氏の人間像を多面的立体的に造形するためである。これまでとは異なる、まったく新しい流離の人の姿を造形するためであったのではないか。

古来の伝承の人々の像を重ね合わせながら、須磨での源氏は、歌を詠み、琴を奏で、絵を描く。雅な風流人であり過去を回想して悲嘆にくれるだけでなく、周囲の人への気遣いも見せる人間光源氏として描き出されている。

そうであれば、名文鑑賞にとどまらない、人間理解を深める読みが可能な須磨と捉え直すこともできる。

3. 4 物語内部の記憶

須磨には物語内部の記憶も多数埋め込まれている。例えば、「人々の語りきこえし海山のありさま」(若紫巻)、「霧やへだつる」(賢木巻、藤壺が詠んだ歌)、「上のいとなつかしう昔物語などしたまひし御さま」(物語に記述はないが、朱雀帝と対面した時のご様子)などである。

「人々の語りきこえし海山のありさま」は若紫巻で「従者たちが源氏に諸国の風物について語」ったことを指している。その時は、須磨の地で流離の生活を送ることなど想像だにはおらず、自分とは関わりのないはるかに離れた土地のことだと思って源氏は話を聞いていたというのである。須磨に付いて来た従者のひとり良清が、北山で明石の浦の話をする。明石巻へ繋がる伏線であった。北山での若紫との出会いやその時に源氏が強く意識した藤壺への思慕の深さを、須磨の地でありありと思い出させる仕掛けの記述でもある。須磨で良清は、渡る雁の姿を眺めて光源氏の歌にこたえる和歌を詠む。光

源氏ひとりの人物造形だけではなく従者たちそれぞれの過去と現在を重ね合わせながら、ひとり一人のそれぞれの家族への思いが、地の文だけではなく作中人物が詠む和歌でも描き出されているのが、須磨の特徴である。

直接に、「思し出でて」「思ひ出でたまふに」という表現も見られる。「十五夜」の月。月を眺めることを契機として、記憶が蘇る場面は源氏物語には多数ある。

「月のいとほなやかにさし出でたるに」から源氏の歌「うしとのみ」までも、「月」をキーワードにして、全編と関わらせながら丁寧に読むことも可能になる。この時に是非、「月」が描かれている源氏絵を合わせて提示してみたい。

紫式部が須磨の地を選んだのは地理的条件だけではない。「須磨」は、平安中期の人々にとっての「共同の記憶」を呼び起こす地(装置)、場(トポス)であった。当時の「共同の記憶」を現在の読者にも共有してもらうことは、原文と注釈を丁寧に読むことでも可能であろうと思われる。が、読者(学習者)が自身の記憶を呼びまじ自己と関わらせて読むことは、原文を読むだけでは容易ではない。そこで、現代の源氏絵を須磨の「もう一人の読者」と読みの「表現」として登場させ、それと対話することを通して、読者の自己の記憶を想起させ、それと交差させながら原文を読む方法が有効ではないか、というのが本稿の提案である。

4. 絵画と《記憶》の問題系

4. 1 記憶のリコール(再生)

佐野(2000)は、美術史研究の立場から、国宝「源氏物語絵巻」の画面は、描かれた景物が物語の前後の時間を取り込んで、絵を見る者の思いを物語の時間の流れへと誘うと述べている。重要なのは、「絵を見るものの思いを」の部分である。物語の読者が物語絵を見る時に、「情景を設定する景物」から物語の場面を思い出し、その場面だけではなく、物語の前後の時間、流れに思いを馳せるように促されるという。同様のことを、河添(2006a)は国文学研究の立場から次のようにいう。

「源氏物語絵巻」の各段の絵は、かなり長いスパンで考えるべき、懐かしい物語の時間を取りこんでいるのではないか。あるいは鑑賞者が思い出の場面の時間をその景物に投入して享受しうるような、そんな仕組みをもっていることに注意したいのである。今回、復元模写の完成により、絵の細部が判明したことで、離れた時間の蓄積がさらに鮮明になったと思われる。

(中略)しばしば言われるように、徳川・五島本「源氏物語絵巻」は、『源氏物語』を知らない者が作品の筋を知るために享受するものではなく、『源氏物語』を知りに知りつくした者が楽しめる絵巻である。絵巻

の絵も『源氏物語』に通暁した制作者の記憶がさまざまに取りこまれ、またさらに鑑賞者の連想の回路に放たれることで、さまざまな意味を生成しうることができる。（p2）

河添は今橋（2006）の発言を引用しつつ、心理的分析によれば、記憶には三段階があり、絵画はこの全部の記憶の過程を複合化ないし総体化した形であらわれてくるものであること。日本絵画に関していえば、芸術家個人の経験や知識だけでなく、多くの場合、文化的コンテクスト、言い換えれば古典知に依拠している場合がきわめて大きいということは、絵画と《記憶》の問題系を考える際に示唆的なものであると述べている。また、河添（2006b）は次のようにも言う。

徳川・五島本「源氏物語絵巻」における制作者と鑑賞者の記憶を考えようとする際にも、集合的記憶/個の記憶といった概念は有効な補助線になりうる。（略）絵巻にあって多層的時間が浮上するのは、離れた物語本文についての制作者の記憶がリコールされ、それが一つの絵に注ぎこまれるからではないか。（略）あるいは、鑑賞者が絵を見ることによって、離れた物語本文についての記憶を呼びさまされるからではないか。絵の制作や鑑賞にあたり、物語本文の記憶が集められ、再構成され、意味が生成されるというのが、絵巻の制作者と鑑賞者双方にイえる記憶のリコールの機制であろう。（pp.51-53）

絵を見ることにより鑑賞者にも「記憶のリコール」（再生）が行われる。それは、物語本文の記憶だけではなく物語が内包する集合的記憶（共同的な知の記憶）からも生成される制作者および鑑賞者の個の記憶の再生でもある。勿論、記憶のリコールは原文を読むだけでも行われるが、絵と原文（物語）を照らし合わせながら見る、読むことで、「多様な記憶を呼びさまし、解釈をたぐりよせる開かれた場」が生まれる可能性が高くなる。

筆者は2014年の学会発表で、「物語の記憶」には、①物語に埋め込まれた先行する作品の記憶、②物語に蓄積され時には回想される物語内部の記憶、③史実や現実、先行する文学作品や物語内部の記憶などから受容者それぞれに想起される記憶の3種類があることを論じた⁵⁾。

本稿では特に、③受容者それぞれに想起される記憶に焦点を当てて、現代の源氏絵「須磨」（下村良之介作）と原文を対照させて読み、「見る」と「読む」を行き来させながら、鑑賞者（学習者）の個の記憶のリコールの「場」づくりに焦点化した授業提案を行う。

5. 現代の源氏絵「須磨」（下村良之介作）

本提案で用いる絵画は、「須磨」（下村良之介作）である。『王朝の香り 現代の源氏物語絵とエッセイ』

（2002）に下村氏のエッセイとともに収録されている。



図2 「須磨」（下村良之助作）⁶⁾

二重像の光源氏の顔が画面の右下に大きく描かれている。薄紫の直衣であろうか。流離の人とは思えない雅な都人の装いである。しかし、表情は何やらもの思いに沈んでいるようである。顔の右側がうつむき加減に描かれているせいだろうか。視線も右下に向き、何かに耐えているようにも自分自身の内面に向き合っているようにも見える。顔の左側は、どこを見ているのか、遠くを見ているようでもあり、何も見ていないようでもある。十五夜の月を眺めているのであろうか。それとも、観月の宴を思い出しているのか。都の女人を思っているのか。

背景は、「海」。顔のすぐ後ろに松の枝が源氏に覆い被さるように描かれている。「海は少し遠けれど」と源氏の住居は海からは少し距離があるように書かれているが、絵では思いに沈んでいる顔のすぐ右横が海であり月に照らされているのか黄金の浦波が立っている。月に背を向けているようでもあり、心は月の向こうに都を見ているようでもある。「行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて」を視覚的に感じとれるようにこのような描き方をしたのであろうか。写実的ではなく非現実的な表現方法であるためか、須磨での光源氏の心の裡を考えさせられる絵である。

雅で華やかささえ感じられる装いと複雑な表情。明らかに都とは異なる別世界のような背景。そこに月が出ている。原文を下村氏の源氏絵と対照させながら丁寧に読むことで、読み手自身の経験や記憶と交差させながら読む、見る「場」が成立するのではないかと考えた。

絵の制作について下村氏は次のように解説している。

優雅で、甘美で、非現実的な世界を題材とした『源氏物語』の全巻を通じて最高のモテ男、光源氏は一体どんな顔だったかは、以前から興味を持っていた。過去の源氏物語絵巻では、引目鉤鼻という象徴的な表現で没個性化し、固定のイメージ化を避けているのが通常であるが、今回の依頼を受けて、私はあえてそ

の光源氏の顔をアップで表現することにした。(略)

与えられた「須磨」は、源氏が都を追放され、須磨へ流されて悲嘆にくれる場面である。時の帝の子として、何不自由なく、典雅な都人の暮しを送ってきた源氏にとって、須磨の浦の、荒々しい自然はいかにも過酷で、都を偲ぶ情も一入であっただろう。

そのような複雑な心情を表すために、顔を二重像にした。本来の物語の流麗さには程遠いが、現代的な非現実表現で、物語の世界が感じられたらと願ったのである。(p.37)

引用部を学習者に提示するかどうかは迷うところであるが、絵を「もう一人の読者」(現代の日本画家)の「読み」(解釈)と「読み」に基づく「表現」として捉え、それと対話しつつ思考し読み深めるプロセスを生み出す補助線として、絵と併せて提示することとする。

理由としては、筆者が提案する「見る」と「見ること」レベルの整理(試案)の「言語化」レベルIV「テキストの特徴や内容、目的と形式の関係を吟味し議論する」、「認識」レベルVI「自分の経験や既知のものと関係付けて認識する」に相当する言語化、認識を達成させるために、有効であるとの考えによる。あとがきを見よう。

このたび『王朝の香り』に収録されました「現代の源氏物語絵」は、その『源氏物語』五十四帖の各物語をテーマに、昭和から平成へ京都画壇でご活躍される五十四名の日本画家に依頼し、できあがった作品群です。(略)

唐様文化の基盤の上に開花した王朝文化、それを代表する『源氏物語』は、私たち「香」の文化を考える者にとっては常に研究の重要な資料として意識するだけにとどまらず、「聖典」とも呼ぶべき存在なのです。(pp.319-320)

絵を提示する際には併せて上の「あとがき」も紹介したい。文学作品としての『源氏物語』の価値はもちろん、「香」の文化を考える者にとって「聖典」とも呼ぶべき源氏物語の文化的資料としての側面、価値も学習者に知ってほしいからである。

6. 学習活動のねらいと概要

6.1 学習のねらい

学習のねらいを「①「憂愁の日々」(須磨)を現在の自分と関わらせて自己の記憶を想起し理解することができる。②なぜ下村氏はこのような表現をしたのか、解釈と表現形式の関係を言語化することができる」とする。

本文を現在の学習者と関わらせて、自分の経験や既知のものと関係付けて認識し、認識したものを言語化するためには、本文を丁寧に読むだけでなく、絵画的資料

を活用する。

6.2 学習活動の概要(高校2年対象)

学習活動の流れは次の通りである。

- ① 「須磨」リード文と「人物関係図」を用いて、これまでの学習の振り返りを行う。
- ② 「憂愁の日々」本文を解説を適宜加えながら、教師が音読する。
- ③ 現代の源氏絵「須磨」と解説文を提示する。
- ④ ワークシートを配布。1) 絵に描かれた光源氏の表情と関連する記述を本文から抜き出す。2) なぜ、その箇所を抜き出したのか理由を書く。3) グループで他の学習者と交流する。4) 下村氏が二重写しの顔で表現したのは、須磨での源氏のどのような心境だったか、自分の考えを記述する。

1) 学習者の多くは、次の2カ所を抜き出すであろう。

A 御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、ひとり目をさまして、枕をそばたてて四方のあらしを聞きたまふに、波ただこもりに立ち来る心地して、涙落つともおぼえぬに、枕浮かばかりになりけり。
B 「げにいかに思ふらん、我が身ひとつにより、親兄弟、片時たち離れがたく、ほどにつけつつ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへる。」と思すに、いみじくて、「いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむ。」とおぼせば、昼は何くれと戯れ言うちのたまひまぎらはし〜

A Bいずれであっても、他の箇所を抜き出していても絵の表現(二重写しの顔のアップ)と関わらせて考えるよう指導する。源氏の心境を自分の経験や既知のものと関係付けて理解するためである。

6.3 受講者の反応分析

今回、高校生を対象とした授業を行うことはできなかった。しかしながら、看護学校での「文学と看護」の授業(2022年5月23日)と勤務校学部1年対象の一般教養の授業(2022年7月1日)で「現代の源氏絵と対照させながら須磨を読む」授業を実践することができた。絵と対照させながら読む原文は教科書ではなく、小学館ハンディ版源氏物語⁷⁾を使用した。高校生対象の授業より該当時間数が少ないこと、古文を正確に現代語訳できることが授業のねらいではないため、現代語訳と詳細な語釈がついたものを用いた。また特に丁寧に読みたい箇所や和歌については、原文と現代語訳を左右に打ち込み、投影して音読した後にノートに視写をもらい、その後解説を行った。全文を原文で読むことより、どうしても原文で読んで欲しい箇所を教師側が厳選して示し、その他はプリントを配布する形をとっている。

したがってここでは、「現代社会や自己の経験と関わらせて古典を読むことができたか否か」に焦点を絞って受講者の反応分析を行う。特に、①絵画と原文を対照させて読む方法について、②問いの出し方や話し合いの有無等教師の手立てと言語化された受講者の反応の関係、の2点に着目し分析考察を行う。

6. 3. 1 萩看護学校第二看護学科での実践

(1) 授業の概要

- ・講義名：「文学と看護」1（全15回本実践は第7回）
- ・実施日：2022年5月23日
- ・受講者：第二看護学科2年（18名）

毎回今日の源氏絵を提示。第7回「須磨」は、現代の源氏絵「須磨」を提示した。原文は教師が抜粋したものを投影しプリント配布も行う。毎回感想カードに授業メモ（問いについての自分の考えを記入）と授業後の振り返りを手書きで記入する。話し合いを毎時実施する。

(2) 現代の源氏絵「須磨」を見て感じたこと

導入でこれまでの振り返りを行った後、現代の源氏絵「須磨」を提示（プリントも配布）して、原文を読む前に、「絵を見て感じたこと、思ったこと」を自由に書いてもらった。

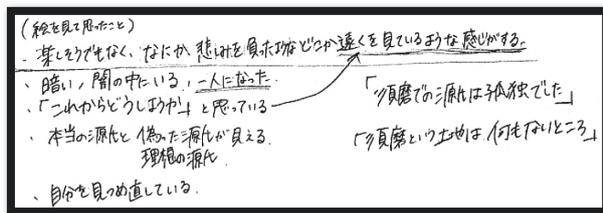


図3 感想カードの一部

「暗い、闇の中にいる、一人になった」といった絵全体から感じた印象だけを記述したものもある。また、「楽しそうでもなく、なにか、悲しみを負ったような、どこか遠くを見ているような感じがする。」といった、感じたことと「何をみてそう感じたか」といった根拠を視線（部分）からと示したものもある。また、書く時間を7分程度取ったため、「これからどうしようか」や「自分を見つめ直している」などの、これまで学習した物語の内容や展開と関わらせた記述もみられた。

(考察)

○絵の見方について

これまでの講義で、絵を見て思ったことと、絵のどこからそう思ったか根拠も書くように促していたため、それが定着したと考えられる。また、絵の見方についても「見る」「見ること」の9段階の能力レベル試案（坂東2019）の方略レベルⅠ～Ⅲ「全体をおおまかに捉える」「部分を見る」「部分と部分の関係を見る」という順で「見る」と説明を行っていたため、まずは全体から

受けた印象を、次になぜそう感じたのかの根拠を「部分」に着目して、言語化する際も見方の順をおって記述できたものだと考えられる。どうすれば「よく見る」ことができるのか、見方の方略を知っており、その見方を使えるようになっている。

○絵と物語の内容を関連させて言語化することについて

この段階では、導入でこれまでの振り返りを行ったが「須磨」の原文と照らし合わせながら読むことはまだできていない。そのため、「自分を見つめ直している」という記述はあっても、どんなことを考えてどのように自分を見つめ直しているのか、その具体的な内容や詳細は書かれていない。ただし、これまで学習した物語の内容が、絵を見ることで思い起こされ、絵と物語を関連づけて「意味内容を構成し言語化する」（言語化レベルⅡ）ができていた。しかし、絵と該当の原文を対応させながら記述する言語化レベルⅠ「見えるものと言葉を対応させる」はほとんどみられなかった。

(3) 解釈の根拠を説明する

近くの人と絵を見て感じたことについて話をする時間を3分とった後、自分の解釈の根拠を説明するための準備段階として、A「須磨での源氏は○○でした」とB「須磨という土地は○○でした」の○○を自分の言葉で書くという課題を出した。Aについての17名の回答を次にあげる。

- 須磨での源氏は孤独でした。
- 須磨での源氏はたそがれている。
- 須磨での源氏は気分低下中。
- 須磨での源氏は何かを考えている。
- 須磨での源氏は思いにふけ自分と向き合っていた。
- 須磨での源氏は月をみて自分を見つめ直すのでした。
- 須磨での源氏は悲しみ悩んでいる。
- 須磨での源氏は闇の中でした。
- 須磨での源氏は不安と前向きな気持ちの二面性を持ち合わせていました。
- 須磨での源氏は悲しみ、何かに思い悩んでいる様子でした。
- 須磨での源氏は内にある自分、今までの自分を知ってどれだけめぐるまれていたのか、を思い知った。
- 須磨での源氏は考え事をしながら悲しみにたえているのでした。
- 須磨での源氏は本当の自分と理想の自分に混乱しているようでした。
- 須磨での源氏は何かを考えているようでした。
- 須磨での源氏は現実を受け入れたくない、不安定。
- 須磨での源氏は考え事をしている、不安がある。
- 須磨での源氏は本当の自分と理想の自分が混乱している様子でした。

(17名回答、1名欠席)

この後に3～4名のグループで話し合いを行った。何で？ふーんといった反応があり、どういうことか聞き返したり、それに対して解釈の根拠を相手にわかるように絵を示しながら説明する様子が全グループで見られた。

(考察)

○解釈を言語化する

例文の○○の中に自分なりの言葉を入れることにより絵と物語内容を関連づけて解釈したものが明確に言語化され自他に共有できるものとなった。さらに、グループでの話し合いでは、「なぜそうなの？」という他のグループメンバーからの「問い」に対して説明するという自然な文脈が生まれた。「問い」に対して今度は自分の解釈の根拠、つまりは意味生成の過程を絵をともに見ながら言語化して説明する必然性が生じた。絵を見て思ったことを書くという最初の「問い」は自分が感じたこと、考えたことを言語化するものであったのに対して、今度は解釈の過程を相手に分かりやすく説明する必要があり相手の反応を確かめながら話すというより意識的、メタ的な言語化が求められることになった。さらに、絵を見ても人それぞれの解釈があり、言葉の選び方があり、その表現の仕方を吟味評価する実の場となった。

「見る」「見ること」の9段階の能力レベル試案(坂東2019)の思考レベルIV「他の情報を参照して解釈する」、言語化レベルV「解釈の根拠を説明する」に相当する言語活動であったと考えられる。

(4) 絵と原文を対照させて読むことによる読みの変容

原文(現代語訳)を読むだけでなく、絵と原文を対照させながら読み、「見る」と「読む」を連動させて解釈を言語化し、話し合いで「解釈の根拠を説明する」(言語化)することによって、「読み」はどのように変容したのだろうか。ある受講者の感想カードの記述を次に取りあげ分析考察を行う。

〈須磨での源氏の表情から〉

2つの顔、いつもの表情に不安、さみしいという表情も表れている。入り交じっている状態。

〈桐壺院はどうしてほしいと遺言したのか〉

私という後盾を失っても、いろいろ問題がある、身分の低い光源氏を差別することなく、今まで通りの世話をしてやってほしい。

〈須磨に流されて、表情から〉

内にある自分、今までの自分を知って、どれだけめぐまれていたのか、を思いしった。

〈十五夜(満月の夜)〉

前半・藤壺を思い出し

「をりをりのこと思い出し」(どのようなことを思い出したのか)→十五夜の満月をみて、昔の管弦の御遊びのことを思い出し、京でも皆月を愛でているのか、

と昔のことを思い出した。藤壺との思い出がいろいろと思い出された。

後半・「恋しく思い出できこえたまひて」) どうして兄のことを恋しく思い出したのか)→昔話をしてくれた姿が父に似ていたこと、兄のやさしさを思い出して、兄からの思いを感じこいしいと思い出した。

(感想・質問・意見・要望)

光源氏がどうして兄の恋人に手を出し続けたのかが理解に難しかった。紫の上もいるのに、、、と思った。しかし落ちぶれていく自分にもついてきてくれる人を見て、須磨に流されてやっと自分の行為をかえりみることや人の気持ちを知ることができたのだと感じた。

最初に絵を見たときに「2つの顔」と書き、その2つはいつもの表情と不安、さみしいが「入り交じっている状態」と記している。これが次には「内にある自分、今までの自分を知って、どれだけめぐまれていたのか、思いしった」とどんなことを思い知ったのか、その内容について具体的に記述している。

(考察)

○自分の「問い」が生まれ原文を読みそれを考える

なぜ、2つの顔が描かれているのか。最初に絵を見たときに「問い」が生まれたことが分かる。「どうしてだろう」と考えながら、原文を読むことで、「見る」「見ること」の9段階の能力レベル試案(坂東2019)の「言語化」レベルIV「テキストの特徴や、内容、目的と形式の関係を吟味し議論する」、レベルVI「ひとまとまりの視覚テキストを対象とし、意味を構築したり、解釈の根拠を挙げたりして説明する」に相当する読み、解釈が生まれ、それを反映した記述内容になっている。これは、思考レベルV「内容、目的と形式の関係を吟味評価する」が絵と原文を対照させながら読むことで行われた結果としての記述内容の変化であると考えられる。「どれだけめぐまれていたのか」と思い知り、今までの自分の行為を京から離れた須磨で捉え直している表情であると「内容、目的と形式の関係」について言語化を行っている。

○現在の価値観と照らし合わせながら読む

これまでの3回の講義で源氏物語を読んで、現在の価値観と照らしあわせると様々な疑問があったことが記述されている。光源氏の行動を理解することが難しいという思いは、他の受講生の感想にも多い。

この現在との違い、違和感が重要だと考える。なぜなら、その違和感がどこからくるのか、それを考える契機となるからである。当時の価値観や社会と現代のそれはどう違っているのか。普段、自明と思っていることを改めて問い直すことになる。これが、古典を読むことのひとつの意味、意義ではないだろうか。

（5）自己と関わらせて読む

それでは、自己と関わらせて読むことはできたのだろうか。授業の振り返りのコメントをあげる。

1人になると、疎外感や孤独感がどの時代でもうまれるんだな、とわかった。須磨の秋の歌で、遠い海が近くに聞こえるとかいてあり、私も海の近くに住んだことがあって、意識して聞かすが、無気力な状態の時にしか海の音はきこえなかった。なので、光源氏も無気力で、手づかず状態だったんだなと思った。
視覚が障害されると聴力が発達すると聞かすが、その分悩むんだろうなと思った。

萩看護学校は、校舎のすぐ近くが菊が浜であり、日本海に面している。そういった地理的な条件も考慮に入れる必要はあるが、「私も海の近くに住んだことがあり」から「なので、光源氏も」という記述は、自分の経験と照らし合わせながら光源氏の心情や状態を推測したものとなっている。古典を自分とは関係のない別の世界のこととして読むのではなく、「現代社会や自己の経験と関わらせて古典を読むことができた」ことの証左と捉えられる記述だといえる。他にも次がある。

桐壺院の遺言から光源氏を心配する気持ちや兄弟仲良くしてほしいという親心が感じられた。
藤壺や紫の上、朱雀院のことなど、様々な人を思い出し、想うことが、人間の心情が表れていると感じた。現代の視点で見ると、色々なことをしてしまった光源氏であるけれど、考えや想いは非常に人間らしいと感じた。

「風景の須磨」「名文鑑賞の須磨」といわれるが、今回、現代の源氏絵を用いることで、人間理解の須磨としての読みの可能性がみえてきた。

6. 3. 2 山口大学学部1年（共通教育）での実践

（1）授業の概要

講義名：「源氏物語の受容」（全8回）

本実践は、第4回目。

実施日：2022年7月11日

受講者：78名（工学部、医学部看護学科他）

全8回の共通教育「源氏物語の受容」（学部1年生対象）の第5回目「須磨での源氏」である。受講者は78名。工学部、医学部看護学科の学生が主に受講。

（2）現代の源氏絵「須磨」を見て感じたこと

本講義では、学内のシステムを用いて導入で「絵を見て感じたこと」を送信してもらった。

絵の手法や構図に着目したもの、アップの顔の描き方に着目したもの、背景の「月」に着目したもの等、学生それぞれが着目した観点は異なっている。

これまでの物語の展開を振り返る前に最初に絵を提示

し絵を見て感じたことを言語化してもらったため、物語の展開や内容と関連付けた記述はほとんどなかった。それに対して、認識レベルⅢ「構成要素の関係を認識する」や方略レベルⅢ「部分と部分の関係をみる」の絵の部分に着目して、そこから想起したことを書いたものが多かった。中には、言語化レベルⅥ「ひとまとまりの視覚テキストを対象とし、意味を構築したり、解釈の根拠を挙げたりして説明する」記述もあった。

（3）絵と原文を対照させて読むことによる読みの変容

最初に絵を見せて、その後これまでの物語の展開をおさらいした後、適宜解説を加えながら原文を読んでいった。そのため、振り返りでは、「最初に源氏絵を見た時と授業後に改めて絵を見た時では、印象ががらりと変わった」という内容の記述が多くみられた。そのことに言及している大学1年生の振り返りの記述を次にいくつか取りあげる。

須磨の源氏の絵を最初に見たとき、月、白波の立つ海や源氏の顔からわかる心情を想像することが難しかったが貴種流離譚、在原業平などと、須磨という場所であることは深い関連があり、とても考えられた絵であることがわかった。源氏が、須磨にいて寂しく思う気持ちを共に来てくれた人たちには見せないように明るく振舞っているということを知り、源氏は人情味豊かで、けなげな人物であると、好印象に思った。

内容を知る前と後で絵の捉え方が変わりました。背景は源氏が都を思って眠れない夜に、波の音がとても聞こえてくるのがとても伝わってきました。また複雑な感情が2つの表情で表されていることが分かりました。

源氏絵しか見ていなかった時と、原文を読んだり背景を知ったりすることで感じ方が変わりました。光源氏は自分の意思で須磨に行くことを決めたけど、行った後に考えてみると、一緒についてきてくれた人たちや、宮中に残してきた紫の上のことを考えたりすると、やっぱり余計につらくなるだろうなと思いました。また海が遠いにもかかわらず波の音が聞こえるというのは、夜になると寂しさや切なさ悲しさが大きくなって海の波の音はそういう気持ちを強調している表現なのではないかと思いました。

最初は須磨での表情は、まったく意味が分からない絵であったが、講義を受けていくうちに左右の表情に違いがあるのは、不安や申し訳なさ、寂しさなどの様々な感情が混ざり合って複雑な感情になっているからだと見えてきました。須磨は人の名前だと最初は思っていた場所の名前だと分かりました。

須磨の絵は、光源氏と月と海と松というシンプルなものであるが、顔を二重にすることで光源氏の複雑な胸の内を表現しているおもしろいと思った。また、背景に用いられている月などにもそれぞれ意味が含まれており、それらからも光源氏の心情が想像できた。

自分の犯した過ちのせいとはいえ大切な人たちと慣れ親しんだ土地から去るのはとてもつらいことだと思った。また紫の上のおかれた状況も厳しいものになってしまった。その中で光源氏との歌のやりとりと父親と継母の冷たい対応の対比がより紫の上の孤独を際立たせているように感じた。二つの顔が描かれている源氏絵も描き手がどのように物語を解釈して描いたのかわかるのでとても面白いと思った。

授業で見た光源氏の絵では、物語を知ることによって大きく意味が違って見えた。絵には二つの顔があり、月を見ている顔は昔のことを思いだして寂しくなっている。顔が下を向いているのは、自分がしたことへの後悔と連れに対する申し訳なさを表現したものだと考えられた。認識がこれだけ変わるの面白いと思った。

当然の結果であるが、絵を見ると読む、解説するをどのような順番で行うかによって、記述内容が変わっている。物語の展開を振り返る前に、今回の授業では最初に絵を見てもらった。これまでの展開や須磨という場所の意味、該当原文の内容を理解した上で、絵をもう一度見ると「内容を知る前と後で絵の捉え方が変わりました」という記述にあるように、物語絵として原文の表現と絵を照らし合わせながら見る「見方」に変化している。原文の理解が絵の理解を深め、さらに原文の表現と絵の表現を関係させて、絵師を「もう一人の源氏物語の読者」として、対話的に読むことが行われている。

(考察)

「見る」「見ること」の9段階の能力レベル試案(坂東2019)に照らすと、絵を最初に見てもらった場合は、「認識」「方略」レベルの記述が多くなり、物語の展開を振り返った上で、絵を見てもらった場合は、「思考」「言語化」レベルの記述が多い結果となった。

ただし、単純に絵をいつ見るかということだけが物語の理解に関わると結論づけるのは早計に過ぎる。受講者人数や授業時数の問題も関係すると考えている。

7. おわりに

本発表では、高等学校「古典B310」に採録されている源氏物語「須磨」巻「憂愁の日々」を、現代の源氏絵と対照させて読むことで、「見る」と「読む」を行き来させながら、絵の制作者と鑑賞者(学習者)の個の記憶のリコール(再生)の場づくりの提案を行った。

筆者が実践した2つの授業の受講者反応を分析考察した結果、古典を自分とはかけ離れた遠い時代のものとしてではなく、現在の自己の記憶に通じる、自分と同じ単純ではなく、一面的でない、複雑で矛盾の多い内面を抱えた人間光源氏として理解し、近代的で屈折した複雑微妙な心理や内面が描かれた作品として源氏物語に出会う「場」は成立したと考えている。

今回の絵画的資料「須磨」(下村良之介作)は「複雑な心情を表すために、顔を二重像にし「現代的な非現実表現で」描かれた特徴的な作品であった。受講者にとっては、絵に描かれた現代的な非現実の二重写しの表情は、誰にでもある二面性として可視化され、原文を理解するにしがたがって、須磨での光源氏の内面を自分自身の矛盾を抱えた内面に引きつけて理解し受講者自身の記憶を呼び起こすことが原文を読むだけの場合に比べて容易であったと考えられる。一見かけ離れた世界を描いているかに見えた古典作品源氏物語の原文が、現代の源氏絵を媒介として絵と本文を対照させながら読むことで、現在の自分にも通じるものであることに気付きやすくなり、絵の制作者と鑑賞者(学習者)の個の記憶のリコール(再生)の場が生成された。それが今回、現代の源氏絵を取り上げた理由であったが、その有効性は認められたといえる。「須磨」巻は教材としては、長く「風景の須磨」「名文鑑賞の須磨」といわれてきた。しかし、今回下村良之助氏の光源氏の内面世界に焦点を当てた現代の源氏絵と対照させて読むことで、人間理解の須磨としての読みの可能性がみえてきた。

ただし、本稿で考察対象とした2度の実践は受験が出口ではない、看護学校と大学の教養教育でのものであった。単純に絵と原文を対照させて読むことを高等学校での授業に転用することが有効であるとはいえない。授業の目標をどう設定するか、それが極めて重要である。

本研究で明らかになったのは、絵をいつ見るかということ、教師の出す「問い」や話し合いの有無といった手立てが、学習者の反応に大きく関わっているということに過ぎない。絵の見方に習熟することにより、絵と原文を対照させながら読むこと、理解すること、考えること自己と物語や絵を関わらせて読む「場」、そこから言葉を生み出す「場」の生成は促される。

しかし、具体的な手立てと物語の理解がどの程度関わるかという問題についてはまだまだ検討が必要である。受講者人数や授業時数の問題も関係する。他の条件を同一にした実験的な授業を最初から計画して実施したものではなかったため今後さらに検討を重ねる必要がある。

学ぶ楽しさを実感し真の学ぶ喜びを知ることは、受験が出口であろうがなかろうが、主体的な学びを成立させる源泉となる。学びの時空が広がることは、学び手の内

面世界に奥行きが生まれることに繋がる。絵画と古典作品のことばの往還により、広がり深まり繋がる「場」が生成される古典の学びをこれからも追究していきたい。

引用文献

- 秋山虔・三田村雅子：源氏物語を読み解く、小学館、88-89、2003。
- 阿部秋生他：古典セレクション 源氏物語〈全16冊〉小学館、1998。
- 一色恵理：「源氏物語」教材化の調査研究、溪水社、2001。
- 河添房江：復元模写から読み解く「源氏物語絵巻」と『源氏物語』－「夕霧」「御法」「東屋（二）」を中心に－、『国語と国文学』（東京大学国語国文学会）、至文堂、pp.2-12、2006a。
- 香老舗松栄堂広報室編：王朝の香り 現代の源氏物語絵とエッセイ、青幻舎、36-37、2002。
- 佐野みどり：じっくり見たい『源氏物語絵巻』、小学館、24、2000。
- 鈴木日出男：『源氏物語』を読みとくためのハンドブック《自著自讃 ふっくれっとNo.129》、三省堂、1998a。
- 三省堂 | 源氏物語ハンドブック (sanseido-publ.co.jp) (2022.9.14閲覧)
- 鈴木日出男：『源氏物語』を読みとくためのハンドブック》、三省堂、139-140、1998b。
- 原岡文子：教科書の『源氏物語』「若紫」垣間見小考－教材化の史的変遷、そして史的文化的状況の中での受容、『愛知県立大学説林』（65）、愛知県立大学国文学会、27-33、2017。
- 坂東智子：「見る」を含む学習の系統性（1）－漢字教材を中心に－、『研究論叢』第68巻、山口大学教育学部、181-190、2019。
- 馬淵和夫他：古典B310 古典B 古文編、大修館書店、2014。
- 三田村雅子・河添房江：描かれた源氏物語「源氏物語絵巻」と物語の《記憶》をめぐる断章（河添房江）、翰林書房、50-55、2006b。

注

- 1) 「言語化能力」は、浜本純逸（2011）『国語科教育総論』溪水社、52-57（第四章 国語科で育てる学力-言語化能力の教育）による。同書では、「私は、ソーシャルのいうランゲージにこれからの国語科教育の根基となるものを見出したい。（「言語能力」という用語は、これまでにわが国の国語科教育界でさまざまな概念で使われてきたので、それから自由になるた

- めに、「言語化能力」という訳語を当てておく。）と説明されている。本研究では、豊かな言語生活を生み出す「言葉」そのものを生み出す力と捉えている。
- 2) 平成30年告示の高等学校学習指導要領では、国語科の科目構成が再編され、「古典B」は令和4年度まで。令和5年度より新科目「古典探究」となる。
- 3) 奥泉（2014）ら先行研究の知見を基に、絵や写真を「読み解く力」と「見る」力に関係するキーワードを抽出し、さらに西オーストラリア州「見ること（Viewing）」の「見ること」のレベルF1～8の大目標（1998）から筆者が「見る」力に関係するキーワードを抽出したものを基に、認識、方略、思考、言語化の四領域に分けた「見る」「見ること」の9段階の能力レベル試案（坂東2019）を提案した。「自分の経験や既知のものに関連付けて認識する」は認識レベルVI、「時間軸や空間軸にテキストを位置付けて認識する」は認識レベルVIIIに相当する。
- 4) 図1の地図は、秋山虔監修（2012）『週刊絵巻で楽しむ源氏物語12須磨』『古代駅配置図（延喜式による）』、朝日新聞社、p.11より引用した。
- 5) 坂東智子：国語科教員養成課程で出会う源氏物語（3）－「紅葉賀」巻物語の記憶を読む－、全国大学国語教育学会第127回筑波大会要旨集、351-354、2014。
- 6) 図2「須磨」（下村良之助作）は、香老舗松栄堂広報室編『王朝の香り 現代の源氏物語絵とエッセイ』、青幻舎、36-37、2002に所収のものである。今回の論文掲載について青幻舎ご担当に確認したところ、快く掲載をお許しいただいた。
- 7) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳：古典セレクション源氏物語④（全16冊）、「須磨」巻、小学館、pp.12-101、1998。

附記

本研究は、平成29年度科学研究費補助金（基盤研究（B））（課題番号17H02703）による研究成果の一部である。